

[私の10点] 関直美



今年の6月、彫刻家・関直美の『彫刻を生きる』が論創社から出版された。50年にもなろうとする彫刻家としての幅広い活動内容が、さまざまな文章で綴られ、多様な展開を見せる多くの作品も紹介されている。学生運動が頂点に達し、大学がロックアウトされる60年代後半の時代から、数少ない彫刻科で学んだ女性作家として歩み出した関は、社会に対する関りを大切にしながら、海外展を含めて、多くの展覧会などに出品を重ねてきた。今回の「私の10点」では、木の作品を中心に、どんな試みから彫刻作品が誕生したのか制作方法も克明に記してくれた。

関直美

Naomi SEKI



《Untitled》

ギャラリー山口（東京）1990年
210 x 90 x 210cm 米マツ、スプリング、ヒンジ他

思わずさわったら揺れる、という意外性

足にスプリングをはかせている。となり合わる各木材の間にヒンジ（蝶番）を二箇所ずつ取り付け、ドアのように自在に開閉する。その隙間にくさびを挟みアールを形成。この揺れるシリーズは、足にスプリングをつけると揺れるたびに少しずつ地面から動いてしまう。高さがある形態ではバランスを失い作品が倒れたことがある。鉄板を敷いてスプリングを固定すればいいのだが、床に敷いた鉄板がどうしても見えて気になる。そう、安全性を重視しすぎると面白みに欠けることがある。

1949年神奈川県生まれ 1974年多摩美術大学・同大学院で彫刻を学び修了、行動美術協会奨励賞受賞 1975年グループ「外野展」活動開始（多摩川、川崎、横浜他・以降約10年間）1985年「物いう者たち」と者いう物たち（東京都美術館）1986年「竹芝大作戦」（竹芝栈橋・東京）1987年公開制作「望月 in クロスワーク」（望月町・長野）1988年「真冬の彫刻サクセッション 長崎から仙台へ」（宮城・長崎）、「横浜神戸現代美術交流展」（横浜、神戸）1989年深谷正子ダンスカンパニーとの試み（俳優座劇場、草月ホール他 1998まで10回）1991年「プラザセクション」（プラザギャラリー・調布）1992年「カードワークス」（ギャラリー山口・銀座）、「Woods」（XOギャラリー・ロンドン）1993年「ミニマルコンプリシティ」（BACギャラリー・ボストン）、1994年第4回現代日本木彫フェスティバル大賞受賞 1995年「Fine Art Consultancy」（クローブギャラリー・ロンドン）、「第3回国際木彫シンポジウム」（ホイヤー・デンマーク）1996年「ウッドランド国際彫刻シンポジウム」（アイルランド）1998年文化庁海外派遣員としてアイルランドに滞在、個展 Metal Art Museum Hikarinotani（印旛沼）1999年「エグシャール Arts Festival」（カーロー・アイルランド）、「エクスプローリング」国際彫刻シンポジウム（アイルランド）2000年個展「公開制作 in 上海」（上海製紙研究所）2001年「現代美術国際交流展」（アートガーデンかわさき）2002年「ロフプーラ国際彫刻シンポジウム」（アイルランド）、個展「Sequence—数列あるいは連続」（ガレリアキマイラ・東京）2003年「おんなのけしき世界のとどろき」（東京日仏学院）2004年個展 Metal Art Museum Hikarinotani 2005年「出雲玉造アートフェスティバル」（出雲）2006年「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」、2007年アーティストレジデンスプログラムでアイルランド現代美術館に滞在、個展「アイルランド現代美術館プロセスルーム」2008年「ACKid 2008」ダンス・紙田昇とのコラボレーション（キッドアイラックアートホール）、「Art Kawasaki」Techno Hub Innovation Kawasaki 2009年「ACKid 2009」/ダンス・深谷正子とのコラボレーション（キッドアイラックアートホール）2010年「2010214」（ギャラリー KINGYO・千駄木）、「ダンスがみたい」ダンス・深谷正子とのコラボレーション（d-倉庫・日暮里）2011年「2011214」（ギャラリー KINGYO ）、「Exhibition ACKid 2011」（キッドアイラックアートホール アネックスギャラリー）2012年「2012214」（ギャラリー KINGYO）、「立体造形」（ART FORUM JARFO・京都・以後毎年）2013年「Exhibition ACKid 2013」（キッドアイラックアートホール アネックスギャラリー）、「田人の森に遊ぶ ART MEETING」いわき（2013, 2014, 2016, 2018）2014年「ACKid 2014」ダンス：若尾伊佐子（キッドアイラックアートホール）、「Cross Five」（銀座煉瓦画廊）、「BRA-BA!（ブラーバ）2014」かわさきアートフェスティバル（川崎市市民ミュージアム）2015年「EXISTENCE 存在 / 二つの代謝する細胞」（Gallery COEXIST-TOKYO・）、「アートプログラム青梅 感性を開く—一人ができること」（吉川英治記念館）2016年「同時代アンデパンダン」（同時代ギャラリー・京都）、「JARFO 京都画廊 GRAND OPEN Part.3」2017年「アートアイランズ TOKYO」/大島（2017.9）、父島（2017.12）、新島（2018.9）2018年「かがわ・山なみ芸術祭」（綾川町・香川）個展「Inspecting - 検証する」（天王洲セントラルタワーアートホール）2019年「Midnight Art with Dance」Dao Xuan Festival（ベトナム）、アーティストレジデンス「Art Bio Toilet Project」（Bank ART Station・Kamban's House、フェロー諸島・R16 studio、横浜）2020年「マスク展」（JARFO 京都）2021年「JAALA 国際交流展」（横浜）2022年「現在進行形」（ゆう桜ヶ丘コミュニティセンター・多摩）、「木更津みなとぐちアートプロジェクト」（愛染院・千葉）、「1000枚 Drawing」（GALLERY KINGYO）、「Braid」ダンス深谷正子との Duo（アトリエ第Q芸術・世田谷）、「大地（Ground）いまを生きる」（千年画廊伊之助、池之端画廊）2023年個展「彫刻を生きる」（Gallery KINGYO）、「アートエコーまんのう」（まんのう公園・香川）



《Untitled》

プラザギャラリー（東京） 1992年
850 x 200 x 30cm 米マツ、帯鉄他

テンション＝緊張

長い木材を浮かせるためには、どのくらいの位置にどのくらいの重さをかければバランスがとれるか。この作品を含めて木ばかり使っているように見える作品の中で、その部分の固定が必要な場合は鉄を溶接してジョイントをつくる。ちなみに溶接は好きな仕事だ。



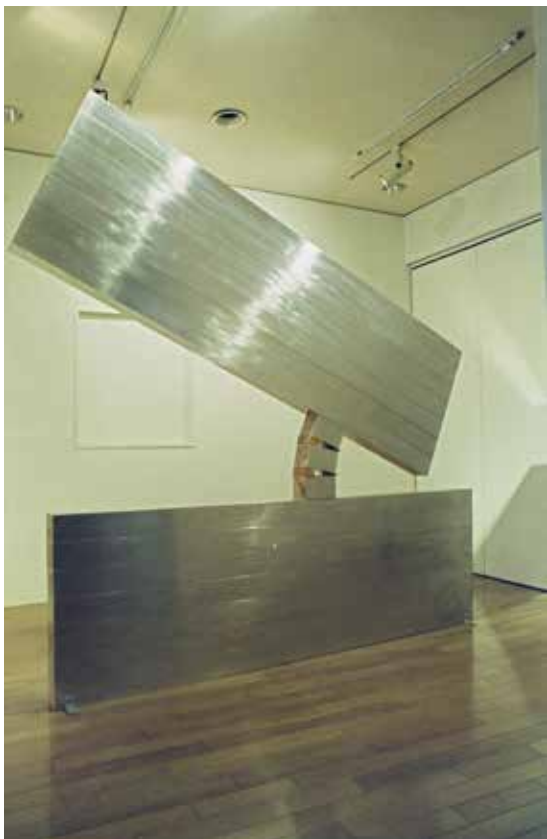
《交信 02》

第4回現代日本木刻フェスティバル(岐阜県) 1994年
150 x 190 x 300cm 米マツ、アルミ、ワイヤー他

木材のスクエアに象の鼻のような飛び出たアルミパーツがバランスを取るためには、立方体の木材のおもりはどのくらい、どの位置に固定したら成立するかを試してみた。

昔の竿秤(さおばかり)をご存知だろうか。長さ60cmくらいの竿についているヒモを片手で持ち上げ、計りたいものを右にぶら下げて、左にぶら下がっている分銅を竿が水平になるまで動かし、その状態で竿に書いてある目盛りを読んで重さを計るというもの。そんなイメージに近い作品。

前ページの作品では溶接部分が紐の位置になる。この作品ではおもりを吊るす点が紐の位置。



《神樹を使う》

ギャラリーキマイラ（東京）1996年
 上 200 x 200 x 10cm アルミ他
 下右 200 x 220 x 45cm アルミ、神樹他
 左 150 x 210 x 42cm アルミ、神樹他



アルミをサンドイッチにした神樹はどのくらい斜めに耐えられて自立するか。アルミにはめ込んだブルーのパーツは垂直を示す。
 台風で倒れた神樹を譲り受け半裁した。向かって右が木の上の部分、左が根本の部分でその分太い。それらを立てに半裁してアルミのパーツを挟み込んだ。
 もう一つの作品も小さなジョイントで上のアルミのパーツを支える試み。



《Untitled》

神奈川アニュアル 神奈川県民ホール（横浜） 1996年
 270 x 400 x 800cm 米マツ、アルミ、ワイヤー他

アルミの長いパーツを気持ちのいい角度で止めることをめざした。”いい加減”の位置を探り当てワイヤーで固定している
 この頃こんなことがあった。
 アトリエでテストする工程でパーツをチェンブロックにぶら下げ、チェーンをガラガラたぐり始めた時、バランスが取れずにパーツはふられて外へ飛び出した。一瞬のことだった。アトリエのガラス扉2枚が外へ倒れた。外には誰もいなかった。いやあ、助かった。それからは、天井の梁のチェンブロックを1個だけでなく2個に固定して使うようにしている。



《記憶容量》

撮影 / 奥村基

千空間（東京） 2001年
300 x 200 x 120cm マツ、鉄他



w3m x d1.2m x h30cm のスクエアを細い3本の足で立たせてみる。垂直に足が生えているのではない、足は逆Lの形態をしている ジョイントとして鉄の2 x 2 cm 角でアールをつくりスクエアに埋め込んでいる
木材は吸収した二酸化炭素が固定されているのだが、いや私がつくり続けてきた年月も固定したいと「記憶容量」と命名。

自身撮影
日付けあり



《Untitled》

メタルアートミュージアム（千葉） 1998年
45 x 220 x 800 マツ、鉄板他

立てた木材 17 枚に鉄板を差し込んで前のめりに立たせてみる。丸太から角材を取ると皮の部分が残る。その部分をいつか使ってみようと思っていた。

会場のメタルアートミュージアムは2間の幅で10間近くの細長い空間、その空間に呼応した。

注：1間は約1.82m



長い角材を曲げてみる

角材の曲げたい位置を中心に長さ40cmほどに、細かく切れ目を入れその部分をお湯につける。柔らかくなった頃合いを見て切れ目にボンドを入れて曲げる。柔らかくなったとはいえ曲げるには、それでも相当な抵抗力がある。例えば山形県の天童木工の家具のような曲げのテクニックを、いつか自分でやってみようと思っていた。それを逆L字にワイヤーとワイヤーフックで固定していった。ワイヤーフックは一方方向に動かして固定する器具、ピクチャーレールに使われている。曲げた木を立たせる行為を繰り返すそれは起承転結のないドラマ

《数列あるいは連続へ》

ギャラリーキマイラ（東京） 2002年
 メインホール ツガ、ワイヤー、ワイヤーフック他
 左上 120 x 220 x 80cm ツガ他
 左下 140 x 160 x 7 米マツ、鉄板他



撮影 / 玉内公一



《A Tree in A sculpture》(Offaly, Ireland) 2002年
270 x 800 x 600cm

アイルランドで参加した国際シンポジウムのひとつ、Offalyでの現場制作。
どこまでも続く平坦なスペースの現場で、天を仰ぐパーツをつくり固定した。遠くに低い森がある。その森から白樺を掘ってきて植えてみた。もちろん許可をいただいている。



《階段のゆくえ》

Gallery KINGYO (東京)

280 x 270 x 70cm ランバーコア、プーリー他 2023年

今回、木を中心に作品を選んだので、近作も木を使った作品にした。とはいえランバーコアという集成材を使用している。なぜか いわゆる「木」にこだわらなくてもいいという単純な動機から集成材も木の仲間である。ランバーコアは軽い。それでも組み立てると一人で取りまわすにはちょっと面倒だ。



《高みから》

メタルアートミュージアム (千葉) 2004年

a 180 x 225 x 90cm (吊った状態) マツ、鉄板、アロエ他
b. 30 x 180 x 120cm (壁に固定)

下から仰ぎ見る作品をつくる

会期中に水をやらなくて済むアロエを選んで植栽した。植物を使うこと、それは有機的なフォルムを加えること。一方の、壁から飛び出た作品は、帯鉄をどの角度で溶接したらいい感じの鉄の"たわみ"が得られるかを試してみた。



関直美 Interview



川崎市幸区の密集した住宅地に彫刻家・関直美のアトリエがある。道路に面したスリガラスの引き戸を開けると、いきなりアトリエとなる。そこには、今回最新作として紹介されたコンポストエクササイズシリーズ作品《階段のゆくえ》(21頁参照)が置かれていた。そして昨年、木更津市で行われた「木更津みなどぐちアートプロジェクト」に出品要請を受けた同シリーズの作品も戻ってくるようになってきているという。

「お嫁に行ったと思ったら、出戻って来た。お嫁にいけないシリーズです」と、冗談交じりに作家は語る。冒頭から、このシリーズの作品について話が弾んだ。

人間の糞尿も堆肥として肥料に変えて活用してきた、それが現代では化学肥料に置き換わっている。

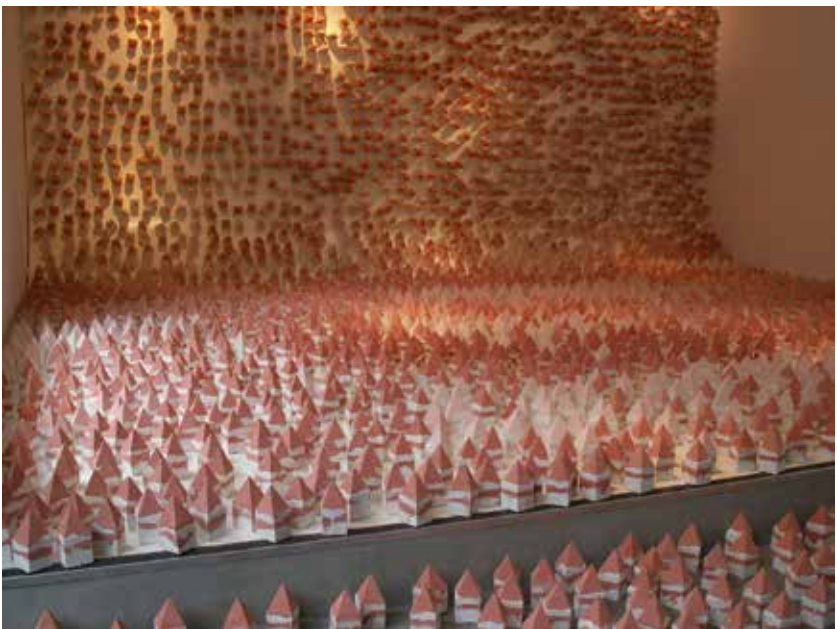
そのコンポストの考え方を、彫刻作品に取り入れて制作しているのが、関直美の最新作《階段のゆくえ》。この作品の階段を登るとコンポストトイレが設置してある。実際に使える機能を備えた彫刻作品だ。循環型社会の発想で自然環境に優しい作品のコンセプトは、行政機関も含め多くの人達の関心を集める。それで展示会などへの出品要請が多いが、最終的には水洗トイレという現代社会の便利な設備に慣れている現代人には、現実的にコンポストトイレの使用までは踏み切れないという現状があるようだ。彫刻と一体化させた作家のユニークな発想も、作品としては受け入れられても、循環型社会のコンセプトを実現するその先まで行くのは難しく、モデル展示に留まり「お嫁にいけないシリーズ」となっている。

「今の世の中便利が当たり前、

トイレにしてもボタン、あるいはノブを引くとサッと水が流れて綺麗にしてくれる。そんな利便性に異議を唱えたい。コンポストトイレは水のないところで使われています。例えば森や畑の中、水の代わりに土などを使用する。土と排泄物を攪拌し一定の量になったら土に返す。だから使用後は便器の中で攪拌するわけです。だけどそれはなんか惨めな気分になって嫌でしょう。だから、作品は大きなギアを繋げて回して攪拌するように作ってあります。楽しいでしょう。ギアが連結して攪拌するから、みんな面白がります。」

とは言っても、作家自身も実際にトイレとして使ったことはないという。

「自分でコンポストトイレを試してないんですけど、3、4年前から野菜くずのコンポストをやり始めていますが、虫もいなければ、臭いもしない。和歌山に住んでいる小さい子供がいる4人家族が普通のコンポストトイレを使っていますが、一週間持



《千単位》千空間 (東京) 2005年 ホワイトセメント、ベンガラ他

つと言います。ですから一週間に一回、畑へ持って行って腐葉土(堆肥)にしているそうです。コンポストトイレは、排泄物をかき混ぜて酸素を入れて、バクテリアが美味しいよと食べると臭いがなくなる。攪拌するというのが大事なことです。それをまぜやってくれること。だから無農薬の畑をやっているような人理解のある人はすごく喜びます。コンポストトイレの趣旨を理解して置いてくれるところがあつたら、是非、置いてもらいたいです。そんな方の元へ出前します! という気持ちです。」

コンポストトイレについて語る関直美の語り口は、自らの彫刻作品を説明する時と同じように闊達に楽しそう。社会批判をしようというイメージを強く感じさせない。大きな歯車を連結して排泄物を攪拌するというユーモアを交えた彫刻作品として、痛快に社会に訴えるアーティストらしい手法を取っている。

《階段のゆくえ》、つまり階段を上った先にトイレがあるのは、

大きな歯車を使う彫刻作品としての魅力ある構造のためにそうなっている。

このシリーズは3年前から始まったものだが、今回の「私の10点」に紹介されたように、関直美は常に彫刻の持つ面白さを伝えようと様々な作品を発表してきている。微妙にバランスを取った緊張感のある作品から、木の素材だけでなく、シリコンやコンクリートを使った作品など幅広い表現を見せてきた。今年、著した『彫刻を生きる』(論創社)に詳しく載っているが、この本を出そうと思っただけを聞くと、

「彫刻って面白いよ、ということが言いたかったのですね。2006年に彫刻家の吉本義人さんと打合せをしていた時へ彫刻は危機だ」と彼が言った言葉が、なんか刺さってね。考えてみたら知らないうちに、90年代頃から、彫刻の世界も元気がなくなってきたなと感じていたんですよ。その当時、私が印象に残っている美術館での彫刻家の



関直美著『彫刻を生きる』
論創社(2023年6月21日発行)
144ページ/四六判/定価2400円+税
ISBN978-4-8460-2280-8

個展は堀内正和さん、土谷武さんがやっていました。作家の若い頃からの作品を俯瞰して観ることで何かが見えて来るんじゃないですか。作家だけではなくて、日本の彫刻の歴史も。だけどそれ以降そうした展覧会がないですよ。途端に若い作家が大きなスペースを使って展示されるようになった。そうじゃなくて、彫刻は地味ですが、その仕事をコツコツと地道に考えてくれる、美術の専門家が今はいないのかなと思いますね」

コンポストイレの話から、話題は日本の彫刻家の現状まで

広がっていったが、関直美は彫刻を如何に大切に考えているかが伝わってくる。

「若い人に彫刻をやって下さいというつもりはないですけど、彫刻の基礎を学ぶと物の質感が、不思議と身に付くんですよ。絵画からレリーフとか立体を作る作家が出てきますが展覧会を見に行く、この人彫刻やったなど分かるんです。言いたいのはそのことなんです。彫刻を学んだからといって彫刻をやらなくていいけど、彫刻的な基礎があればモノの性質、存在感が分かる。

それを若い時にインプットしてもらいたいという気持はありますね。」
こうした美術家としての在り方に話題が広がると同時に、現代の作家の社会性についても考えている。

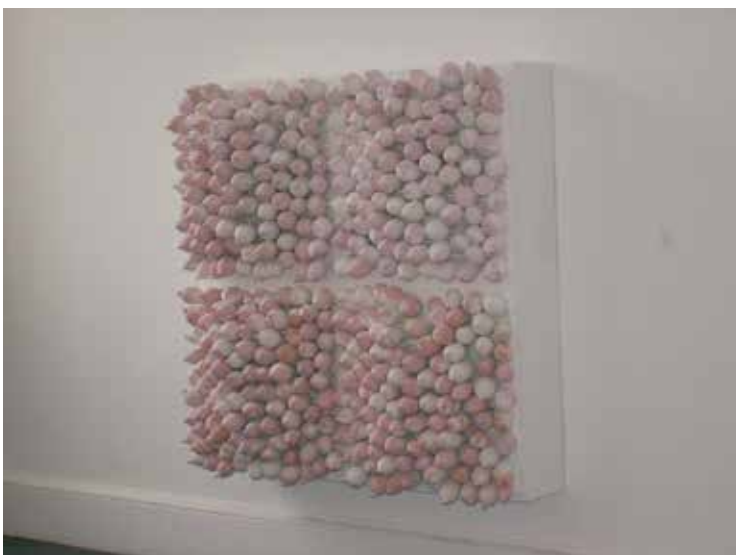
「私たちの時代は作家と作品という捉え方があって、作家も大事だと言っていたけど、今は違ったりり方がある。ドクメンタにしても、ディレクターが集団でディレクトした企画が、一人の作品ではなく、集団でやっている作品を引っ張って来た。一人で作る作品は限界がありますが、それを集団でやれば時間は早くできる。作品がよければそれでいいんですよ。運慶は同じ時代の10年間に、あつちこつち作品があるんですよ、そのくらい集団をうまく使っていました。それと瀬戸内国際美術展などを見ると、ものをつくるのではなく、事を成す、イベントをするというコミュニケーションアートになってきている。結果的に彫刻的なものが残るということ

ではなく、事が大事、行為が大事、みたいなどころがあるとは思いません。この辺も言いたいですけど。」

たが、話を聞いているうちに、『彫刻を生きる』作家・関直美が現在、コンポストエクササイズシリーズに迫り着いたということ、必然として思えるようになってきた。自然環境、人間社会の

中で、彫刻家として生きていくとする作家が、真摯に現状を感じ取り、作品を制作していく過程で創造されてきたことが理解できるような気がした。それも声高に環境問題を語るのでは

なく、ユーモラスに彫刻として発表しているところが、正しく彫刻家なのだ。これから、また、どんな展開の新しい作品を発表していくのか、気になるアーティストだ。



《繰り返しの順序》アイルランド現代美術館 2007年
ホワイトセメント、ベンガラ、コンドーム他



《繰り返しの順序》アイルランド現代美術館 2007年
ホワイトセメント、ベンガラ、コンドーム他